

最優秀賞

今求められる、本当のバリアフリー

鹿児島県立伊集院高等学校 三年 日高 茉莉

「ただいま。」

私は帰宅すると、一階のとある部屋に行く。祖母の部屋だ。私の家は二世帯住宅で、一階に祖母、二階で私たち家族六人が生活していて、計七人での暮らしである。だから私はいつも帰宅すると祖母に声をかけ、祖母から「おかえり。」という優しい返事と笑顔をもらっている。いつも笑顔で、明るくて、優しい祖母。けれども不思議と「秘めた強さ」を感じさせる。

実は私の祖母は、遺伝性の病気で目が全く見えていない。しかしそんなハンディキャップを持っているにも関わらず、祖母は料理や洗濯などの家事をほとんどこなしている。買い物も家に配達を頼んだり、祖父の生前には祖父と手を繋いで近くのスーパーに歩いて行ったりしてい

た。また、私は祖母が左右の靴下の種類を間違えているのを見たことがない。洋服だって、いつもしっかり色まで合わせて決まっている。目の見える私たちにとっては簡単なことだが、祖母にとってはすごく難しいことであるはずなのに、いつもきちんとしている。ただ、そんな祖母の手や腕には、数十個のやけどの跡がある。

これは、祖母が料理を簡単に作れるようになるまでに、どれだけ失敗したのか、どれだけ我慢したのか、そしてどれだけ努力したのかを物語っているものだ。祖母はどんな時も絶対に弱音を吐かないし、一人で出来ることは全て自分でする。いろんなことを、歯を食いしばって乗り越えてきた祖母。だから私は、祖母の優しさの奥にある「強さ」を、無意識のうちに見ているのだろう。明るくて、前向きで、強い祖母。私は心から祖母を尊敬しているし、大好きだ。

日本の現代の医療は進んできているものの、祖母のように目の不自由な人のほかに、言葉を上手く話せない人や一人では歩けない人、耳

の聞こえない人など、さまざまなハンディキャップを抱えている方々は少なくないだろう。たしかに、世の中ではバリアフリー化が進んでおり、音の鳴る信号や点字ブロックなどが近年増えてきている。しかし、どうしてもまだ行き届いていない点も残っている。たとえば、歩道にある点字ブロック。点字ブロックは目の見えない方々に道のりを教え、一時停止の場所も教えてくれ、安全確保の重要な役割を持つ。いろいろな場所に多くの点字ブロックがあつて、とても良いことだ。しかし、自分自身が目の見えない人の立場になつて考えた時、自分には、まず、どこに点字ブロックがあるのかがわからないのである。その点字ブロックにたどりつくまでにどれだけの時間がかかるだろう。つまり、だれかが点字ブロックのある場所まで連れて行ってあげる必要があるのだ。まず、だれかが声を一声でもかけてあげなければならぬのだが、そのことに気づくことがまず難しかったり、声をかけるのに勇気が必要な人もいるはずだ。この「勇気」

と「行動」こそが、今「障がい者」や「高齢者」の方々が本当に求めているバリアフリーなのではないか、と私は思う。住まいや町のあちこちで、いわゆるハード面でのバリアフリーはかなり整つてきた。今もう一度、本当に求められているバリアフリーを考え、地域や周囲の人々がお互いに助け合つていくような社会を真剣に考えられるといいと思う。

そしてもう一つ。「障がい者」を特別視するのをやめるべきであると思う。私たちの中には、足が速い人、遅い人。本を読むのが速い人、遅い人。運動が得意な人、苦手な人……。などそれぞれに「個性」を持っている。そう考えると、視覚や聴覚の障がいなども、見るのが苦手。聞くのが苦手。歩くのが苦手と考えれば良い。得意分野だけでなく、苦手分野も「個性」であり、みんな同じ人間なのだ。そういう風にな少し考えを変えるだけでいい。相手がどのような苦手を持っていても、変わらずに接することができたらいい。

私は今高校三年生。受験生だ。祖母が料理をつくるために何十回も失敗して、何十回も我慢して、努力してきたように、私も受験に真正面から立ち向かい、自分の決めた大学に受かるように歯を食いしばって頑張りたいと思っている。最後の最後まであきらめない心は祖母譲りなのだ。胸を張ってみんなに言いたい。そしてその姿はきっと誰よりも祖母に伝わり、笑顔になってもらえると、私は信じている。



優秀賞

わたしにできることは？

日置市立伊集院小学校 二年 太ふじ なごみ

「うわぁ。おいしい。」

サマーキャンプで作ったごはんは、いつもとはちがうあじがしました。

とれたてのやさいをつかって、みんなでりょうりを作りました。

「せかいには、ごはんを食べられない人がいっぱいいるんだよ。」

と、アフリカに行った時のしゃしんを先生が見せてくれました。男の子が、海べですなを食べているしゃしんです。いくら食べものがないからといって、すなを食べるなんてかわいそうだと思います。パンフレットには、せかいの人々の四人に一人がひんこんだと書いてありました。先生が、

「せかいの子どもたちを少しでもたすけるため

には、どうすればよいでしょう。」

と、みんなにたずねました。わたしは、いっしょうけんめい考えたけれど、考えがまとまりませんでした。ほかの人からもいい考えは出てきませんでした。先生の考えで、二年生は自分用のぼ金ばこを作ることになりました。けれど、もしお金がたまらなかつたらどうしようと心ばいになりました。どうしたらいいのかなと考えていると、いいことを思いつきました。それは、わたしがお手伝いをしてもらったお金やおこづかいを、ぼ金ばこに入れていくことです。

「せかいの子どもたちをたすけるには、お金だけじゃなくて、ペットボトルキャップやプルタブをあつめてもいいんだよ。」

と、先生が言いました。

わたしのかよっているいじゅういん小学校でもボランティアであつめているので知っていました。一年生のさいごに、一回もって行ったことがあります。おかあさんがキャップをあつめてくれていました。けれど、これからはわたし

もキャップをあつめなくちゃと思いました。

パンフレットには、じどうろうどうや、学校に行けない子どもたちのことも書いてありました。せかい中には、わたしと同じくらいの年の子どもたちが、むりやりはたらかされていたり、いろいろなりゆうで行きたくても学校に行けないことを知ってかなしくなりました。ぼ金のほかにわたしにできることはないかなと、考えてみました。そして、三つのことを思いつきました。

一つ目は、今もっているものを大切にさいごまでつかうことです。

二つ目は、サイズが合わなくなったようふくを、すてるのではなくきふをすることです。

三つ目は、わたしはすききらいが多いので、これからは、ごはんものこさずにかんしゃして食べるようにがんばることです。

キャンプで食べたごはんがおいしかったのは、みんなががんばって作ったからだと思います。一人じゃなく、みんなといっしょだからなおき

せかいじゅうの子どもたちが
たのしくくらせますように・・・。



らおいしく食べられました。ぼ金をしたり、ものや食べものを大切にしたり、わたしにできることをつづけることで、せかい中の子どもたちが、楽しくくらするようになってほしいです。

優秀賞

がんばれチャンス

日置市立妙円寺小学校 四年 山内 らん

「チャンス、がんばるんだよ。負けちゃダメ。」わたしも、ギュッと手をにぎりしめながら心の中でおうえんしました。

わたしがこの「サングラスをかけた盲導犬」を読んでみたいと思ったきっかけは、この本に出てくる盲導犬について、きょう味をもったからです。主人公の盲導犬「チャンス」は、ある日白内障という目の病気になってしまいました。盲目のマッサージ師の小池さんは、チャンスが病気になってしまったことになかなか気づいてあげられずにいたある日、町で交通事こにあいそうになります。そのすがたを見た小学生の女の子あやねが、チャンスの様子がおかしいことに気がつきます。しかし、小学生のあやねの言うことは、だれも耳をかたむけてくれませ

ん。そんなある日、町で見かけた小池さんの横には、いつもいっしょに歩いてきたチャンスのすがたがなくなっていました。チャンスは、ろう犬だったことと、白内しようのために、盲導犬きよう会にひきとられていたのでした。今までチャンスと生活していた小池さんも、チャンスがいなくなってしまうことで、マッサージしのお仕事もやめることになりました。やがて、チャンスは盲導犬きよう会で、最後の時をむかえます。チャンスの近くには、小池さんがかけつけ、チャンスに声をかけてあげました。すると、その声が聞こえたのか、チャンスは見えない白い目を開けたのです。そして、小池さんのひざにチャンスの頭をのせてあげると、ひさしぶりに会えたよろこびで、しっぽをふってみせたのです。しかし、次のしゅん間、小池さんにかかえられていた頭をカクツとっ小さくたれて、息を引き取ってしまいます。

わたしのおばあちゃんは、六月にチャンスと同じ白内しようの手じゅつを受けました。チャ

ンスの病気にも、もっと早くに気づいてあげていれば、もっと小池さんの近くですぐすくことができたんじゃあないかな、とわたしは悲しくなりました。でも、チャンスは盲導犬の使命から、だんだんと見えにくくなっていく世界の中で、小池さんのためにできるせい一ぱいのことをしていたのだと思います。目が見えない小池さんのために、小池さんの目の代わりになってあげていたチャンスが、きよう会に返されてしまうときのことを考えると、なみだがあふれてきそうになりました。でも、「チャンスがいなくなっただったたら、他の盲導犬を買うか、もらえばいいんじゃないの」とふとわたしは思っていました。でも、この本で盲導犬は、盲導犬きよう会からかし出されていることや、目に不自由がある方が順番に盲導犬のかし出しを待っていることを知りました。

わたしは、まだ町で盲導犬を見かけたことがありません。これはきつと、目が不自由な方が少ないのではなく、盲導犬の数が足りていない

からなのではと思いました。盲導犬を育てることとは、手間も時間もお金もかかることのようなので、とても大変だと思います。だけど、もっとチャンスのような盲導犬がふえると、目に不自由がある人もいろいろな場所に遊びに出かけたり、人や物とふれあったりする機会がふえると思います。この本を読んで、わたしにもできるボランティア活動をもっとさがしてみたいと思いました。

チャンス、がんばるんだよ。

負けちゃダメ。



入選

ふくしについて

日置市立鶴丸小学校 二年 大らく なみ

わたしのおかあさんは、グループホームというかいごしせつではたらいっています。わたしは、そこに一日たいけんをしに行きました。グループホームというところは、九人のおじいちゃんおばあちゃんがそこにすんで生かっています。みんな、にんちしようというびょうきの人たちです。わたしは、おじいちゃんおばあちゃんをたのしませるためにかみしばいをもっていきました。

その日行くと、みんなえがおで出むかえてくれました。いっぱい話かけてくれました。おちやのときにもってきたかみしばいを二つ読みました。みんなしんげんに聞いてくれました。読み終わると、

「じょうずだね。」

と、いっぱいほめてくれました。とてもうれしかったんです。そのあとみんなにおりがみをおりました。そして、おひるごはんをいっしょにたべました。ここでは、しょくいんさんと同じものをおじいちゃんおばあちゃんもたべています。そのあとは、しょくどうのそうじのおてつだいをしました。ゆかをモップでふいたり、ろうかの手すりをぞうきんでふいたりしました。おじいちゃんおばあちゃんは、おへやでゆっくりしたりじゅんばんにおふろにはいたりしてすごします。なのでわたしは、午前中につくったおりがみに一人一人の名前を書いておへやにかざりました。みんなとてもよろこんでくれました。よかったです。午後もかみしばいを読みました。みんなとてもよろこんでくれました。かえるとき、「またおいでね。」と、言ってくれました。とてもうれしかったです。

今日、ここのおじいちゃんおばあちゃんとお

話したり一日すごして、にんちしようというびょうきでもふつうと同じなんだなあと思いました。

そして、一日かいごのおしごとをしている人を見て、おもたい人をかかえたり、おといれやおふろにいたりまい日とてもたいへんだなあと思いました。

また、おじいちゃんおばあちゃんと話しに行きたいなあと思いました。



入 選

命をすくう献血

日置市立伊集院小学校 四年 宇田 瑞希

「血液が不足しています。献血にご協力ください。」

とテレビである女の人が出ていました。

「献血ってなんだろう。血液をとることかな。」

と私は思いました。そして、お母さんに、

「献血って何。」

と聞いてみました。すると、お母さんが、

「病気やケガをした人たちのために血液を分け

てあげる事だよ。」

と教えてくれました。数日後、お母さんが、

「献血の事を教えてくれるキッズ献血があるか

ら行ってみようか。」

と言いました。私は、献血の事をくわしく知りたくて、行ってみることにしました。

「キッズ献血」がある前日、私は、むねがた

かまってなかなかむれませんでした。当日、会場につくと、三十人ぐらいの小学生がいました。みんなも落ち着かない様子で、きんちょうしているのが分かりました。グループに分かれてちょうしんきで、自分の心ぞうの音を聞きました。ふだん、自分の心ぞうの音は聞こえませんでした。しかし、ちょうしんきを使って自分の心ぞうの音を聞くことができました。心ぞうの音は、ドクン、ドクンと休むことなく同じリズムです。目に見えませんが私のむねの中で心ぞうが動いているということにびっくりしました。次に心ぞうにかんするクイズがありました。その問題は、

「心ぞうの大きさは、どのぐらいでしょう。」

という問題でした。私は、

「自分の手のひらぐらいかな。」

と思いました。でも、正かいは、自分のこぶしぐらいの大ききさでした。私は、その答えを聞いて、自分のむねへ、こぶしを当ててかくにんしました。手のひらよりかは、大ききはありませ

んが、こぶしはレモン一こぐらいの大きさです。心ぞうの音もそうでしたが、心ぞうの大きさも目に見えません。この、「キッズ献血」に参加して心ぞうが私たちの体にあること、心ぞうが動いていること、それは、生きていることだと学びました。

私は、特に大きな病気をしたことはありません。しかし、全国には病気で苦しい人っている人がいるそうです。

「一人でも多くの方が苦しんでいる人を助けようとする気持ちを持って、献血に協力してくれるだけで、人の命がすぐわれるんですよ。」と赤十字社の方が言っていました。そして、血液は、人工的には作ることも、長い間保ぜんすることでもできません。なので、たやすことなく、つねに血液を安定的にかく保つる必要があります。大切な命を、すくうためには、一人一人が献血への理かいをすることが大事です。今、私にできる事は、りっぱな大人になるための、「体」「命」「心」を育てる事です。そして、十六才に

なったら多くの人たちの命をすくうために献血をしたいと思います。



入選

視覚障害者のために

日置市立妙円寺小学校 四年 宮崎 莉子

「すごいなあ。」

たまたま見た番組の中で視覚障害者ランナーが伴走者と赤いひもをにぎり合って走っているのを見て、わたしは、感動しました。見終わった後、わたしはすぐに、姉とひもを持って、目をつぶって家の中を走ってみました。すると、前はまっ暗で、とつてもこわくて、ランナーのように速く走れません。どうしてこわがらずに速く走れるのでしょうか。わたしは、ランナーが伴走者のことを信じているからだと思います。そして、伴走者はランナーが安心して走れるようにいろんな工夫をして助けているからだと思います。

わたしは、ほかに、街中で視覚障害者の助けになるものがあることに気づきました。それ

は、点字という視覚障害者用の文字です。点字は、いろいろな場所、さまざまな物に使われています。

例えば、洗たく機のそう作ボタンです。家の洗たく機にも、ボタンの下に点字があるのを見つけました。

街中では、点字ブロックという、黄色のブロックがあります。実さいにさがしてみると、駅の近くの横だん歩道や、人がよく通る道などに、せっ置してありました。

ですが、点字ブロックがない道の方が多いです。なので、わたしは、もっといろんな所に点字ブロックがあればいいのと思います。

しかし、全ての歩道に点字ブロックをせっ置するのはむずかしいかもしれません。そこで、わたしは、視覚障害者のためにできることを考えました。

一つは、視覚障害者のナビである点字ブロックの上に、自転車などの障害物を置かないことや、空きかん、ビニールぶくろなどのゴミをす

てない事が大切だと思っています。何気なくしている事が、視覚障害者にとって、大ケガにつながるかもしれないからです。

二つ目は、障害者がこまっている時は、声をかけてお手つだいできることがないか、聞いて助けることです。この二つは、今すぐにわたしたちにできるお手つだいでもあるし、障害のある人だけでなく、お年よりや小さな子どもにとっても良いことです。視覚障害者だけでなく、全ての人が、安心して外出ができ、楽しくくらせる日本になるといいなと思います。



入 選

ぼくの役目

日置市立伊集院小学校 六年 逆瀬川 稔亘

「行くよ。」

ぼくは、祖父に声をかけて、車いすをおして歩き出す。ぼくが祖父を車いすに乗せて歩くのは、公園やスーパーマーケットなど広くて長く歩かないといけな場所だ。

祖父は家の中では、かべやダンスなどにつかまりながら歩いている。なぜかという、歩くとひざが痛くなり、しばらくするとひざをさすりながら歩けなくなってしまふからだ。ひざの調子がいい時には、一人で家の回りを歩いているが、調子が悪いと体は元気なのに家の中にじっと座ったままである。ぼくは、その様子を見て「本当は、大好きな畑仕事をいっぱいしたり、自分の足で歩いて好きな所へ行ったりしたいのだらうな。」と思ってしまう。だから家族みんな

で祖父につえを使うように説得したのだが、
「うん。使ってみようかな。」

とはなかなか言わなかった。祖父は口にはしな
かったが、おそらく自分の足で、自分の力で歩
きたいのだろう。でも説得を続けて、つえを買
ってしまおうと、祖父は気に入ったようであ
る時は毎回持って行くようになり自分からも進
んで歩くようになった。以前の祖父と比べると、
ちよつと元気になったような気がした。

しかし、広い場所では歩くのはつらいようで、
そんな時にはやはり車いすでないとだめである。
車いすはとても便利であるが、困ることも少な
くはない。家族みんなで行ったフラワーパーク
で一番困ったのは、上り坂やしばふである。上
り坂は車いすがとても重く、おすぼくにとつて
はかなり力が必要だ。しばふは車輪がうもれて
しまつて、なかなか思うようには進まない。さ
らにしばふの上り坂は、ぼくにとつては地獄で
ある。そんな時、祖父は車いすを下りて無理し
て歩こうとする。ぼくは、

「車いすをおすのはだいじょうぶだよ。おじい
ちゃんは歩くのだいじょうぶ。」

と心配して聞くと、祖父は

「だいじょうぶだよ。歩けるよ。」
と言つて、つえを使いながらゆっくり歩いて行
く。

そんな祖父を見ながら、ぼくはいろいろなこ
とを考えた。車いすの人がいろいろな所にいく
には、段差をなくしたり、スロープにしたりす
ることが必要だ。また電動アシスト自転車のよ
うに電気のモーターが助けてくれたら、上り坂
もすいすいおしていけるかもしれない。

これからも祖父母といろいろな所へ出かけて
いきたい。歩くときには荷物を持ってあげたり、
段差があるところでは手助けをしたいと思います。
しかし何よりぼくがうれしく感じるのは、祖父
がぼくを頼りにしてくれることである。いつも
ぼくが車いすを持っていくと祖父は安心したよ
うに

「ありがとう。」

と言っ乗ってくる。
もちろんこれから祖父の車いすをおすのは
ずっとぼくの役目だ。



入 選

誰かの役に立つ仕事

日置市立日吉中学校 二年 加藤 花音

今年の夏、老人ホームで二日間のボランティアを体験しました。

この老人ホームでは、重度の障害を持った方から認知症の方までが暮らしています。ボランティアを始める前に、係の方から、

「特別養護老人ホームは、どのような場所だと思えますか。」

と質問されました。でも、私は答えることができませんでした。

いよいよボランティア活動が始まりました。まず、入居者の方とコミュニケーションをとる活動でしたが、何を話せばいいのか分からず戸惑ってしまいました。施設の方が話されているのを真似しようと思いました。どうしても実行に移せませんでした。それどころか、戸惑う私

に入居者の方が話しかけてくださいました。

次に、昼食の準備をしました。お茶を渡す時にも注意しなければいけないことがたくさんありました。それは、入居者の方が熱いお茶をこぼすといけないので、冷めるまで手の届かない所に置いておく、お茶の葉が多すぎるとひっかけてしまうので、しっかりと見る、入居者の方には飲み込みにくい方がいるので、とろみをつけるというものでした。お茶を入れることだけでもこんなに心配りが必要なのだと知り、驚きました。

昼食の時も、一人で食事をするのが困難な方もいらっしやって、係の方が食事の介助をさされていました。声かけをしたり、入居者の方のペースに合わせて食べさせたりしていました。寝たきりの方は胃から食べ物を流したり、鼻から流したりしていました。食べ物を流す所を私は初めて見ました。鼻から流している人は、胃に聴診器をあて、シュツという音を確認してから流し始めます。

「確認しなかったら、流した食べ物が肺に入ったりしてしまうから、毎日の行いでも一日三回しています。」

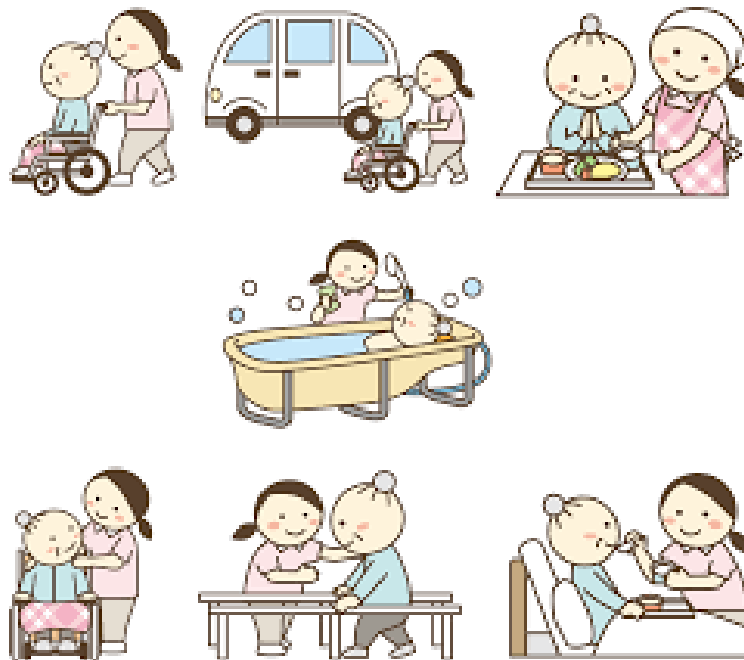
と看護師の方が話してくださいました。どんなささいなことでも気付いて対応していることが分かりました。

その次に、昼食で使うエプロンやおしぼりを洗って干したり、たたむのを手伝ったりしました。汚れがついてしまったエプロンやおしぼりはしっかりと洗い、消毒をした手でたたんでいきました。たたみ方を習い作業をしていきますが、施設の係の方の速さには全然追いつくことができませんでした。昼食に出すエプロン、おしぼりも、入居者の方の洗濯も全て介護士の方がされていました。私は今まで、介護士の仕事は入居者の介護だけだと思っていましたが、裏の仕事までしているとは思いませんでした。介護士という仕事、そして看護師という仕事を違う目線で見ることができたと思います。

ボランティア二日間をふり返ってみると、大

変なことばかりでした。しかし、アドバイスを
いただきながら終えることができ、新たな経験
をすることができました。「特別養護老人ホーム」
について知ることができ、今ならあの質問を受
けたとしても答えることができます。「特別養護
老人ホームは、介護士の方と看護師の方が一緒
になって、入居されている方々の立場に立って
働いている場所。そのために、入居されている
方が安心して暮らせる場所。」だと。

私は将来、薬剤師になりたいという夢をもっ
ています。薬剤師は、病気の方に薬を届ける仕
事をしています。介護と同じように、誰かの役
に立てることはとても素晴らしいことだと思っ
ます。私も病気やけがをした時に薬をもらって
元気になりました。このことがきっかけで薬剤
師を目指しています。このボランティアで介護
の厳しき、楽しさを学びました。この経験を将
来にいかしていききたいです。



《審査講評》

本年度も日置市内の小学校、中学校、高等学校の皆様にも「誰もが住み慣れた地域で安全で安心して暮らせる福祉のまちづくり」の実現に向け、社会福祉に関する市民の理解と関心をより一層高め、住民の主體的な参加による地域福祉活動の展開を図るための一環として「福祉」に関する生活作文と読書感想文を募集しました。その結果、本年度は、小学校五校、中学校一校、高等学校一校から十三点の作品が寄せられました。御指導・御応募ありがとうございました。

福祉について、体験や読書などを通じ子どもたちが日頃考えていることを文章にすることは、自分の考えを明確にし、今後の自分自身の生き方につなげていくこととなります。そのことが、子どもたちの福祉への関心を高め、共生の社会実現をめざす実行力へとつながっていきます。このような活動を通して、日置市が目指す「安全で安心して暮らせる福祉のまち」へとつながると考えています。

最優秀賞に輝いた伊集院高等学校三年 日高茉莉子さんの作品「今求められる、本当のバリアフリー」は、祖母の生き方とおおして本当のバリアフリーとは何かと福祉への自分の気持ちの変容を丁寧に綴った作品です。点字ブロックや音で知らせる信号機、ユニバーサルデザインの商品など身の回りのさまざまな事象に気づき、問題提起をしながら自ら実践活動に取り組む姿に審査員一同、共生の社会への第一歩を感じました。

優秀賞に輝いた伊集院小学校二年 太ふじなごみさんの作品「わたしにできることは？」は、毎日の生活の中で感じた思いやりの心や福祉についての考えを素直な文章でまとめています。自分の命や人の命を大切にしたいという思いが伝わってきます。思い合う心は一人一人の心から心へと広がっていくという福祉の精神を体現しています。

同じく優秀賞に輝いた妙円寺小学校四年 山内らんさんの「がんばれチャンス」は、自分の輝ける場所を探し活躍する不合格犬の姿に自分の気持ちを重ねた作品です。相手の立場になって考え工夫していくことで、今まで不自由だった社会の壁は取り払うことができます。すべての人が自分らしく生きられる社会の実現を目指して、互いの良さに気づき合う社会をめざしてほしいと思います。

その他、惜しくも選には漏れましたが、どの作品も福祉に対して素晴らしい考えをもった作品ばかりでした。福祉について作文を書いたり、本を読んだりする機会は、福祉について自分自身を見つめるよい機会となります。今年度以上に来年度もたくさん作品を応募してくれることを願っています。最後になりましたが、今回、御協力いただきました日置市内の小・中・高等学校の皆様にも心よりお礼を申し上げますとともに、今後ますます福祉への心が広がることを願います。審査講評とさせていただきます。

平成二十七年十月

福祉作文コンクール審査員一同